

大学生の主体的学びを促す教員の視点

— スチューデント・センタード・アプローチについての思索 —

内原香織

(たちばな学園)

問題と目的

大学教育において、学生が自らの学びに積極的に関与する「主体的学び」が重要視されている。

本研究では、教員の授業実践を分析し、学生の主体的学びを促す視点を抽出すること、それらを臨床心理学やカウンセリングの知見から考察することを目的とした。

方法

本研究では、筆者が担当した心理学関連科目の授業実践の分析を行った。分析方法として、筆者自身の内的体験（授業中に観察された学生の反応や発言を教員がどのように感じ取り、どのように工夫や改善を行ったかという主観的記述）を質的に分析し、学生の主体的学びを促すための教員の視点について、重要なカテゴリーを抽出した。

結果と考察

分析の結果、以下の5点が示された。

1) 受容的な「場」づくり

学生が安心して発言や参加を行うために、自由で受容的な「場」作りが不可欠であった。具体的には、グループ活動のルール説明（発言内容は評価されないこと、他者の意見を尊重して聴く姿勢等）の設定や、発言が難しい学生に対するフォロー（それぞれのペースでよいこと、レポートやアクションペーパーでも表現できる等を伝えた）により、学生の生き生きした発言（表現）が増加した。カウンセリングにおける「枠」の設定と同様に、安心安全を感じられる場が、学生の主体的な参加を促したと言える。

2) 実感を言葉にする

学生が心・からだで感じたことを「言葉」で表現することが重要だった。たとえば、グループ活動など、学生自身が、自分の体験を言葉にする機会を増やすことで、学生の理解が深まった。また、教員側が学生の具体的な体験に対して心理学の概念を用いて意味づけすることで、理論への関心を広げるきっかけとなった。カウンセリングプロセスと同様に、授業においても実感を言葉にする作業が、学生の学びを促進すると言える。

3) 対話を大切にすること

一方通行ではなく、学生との対話を大切にする姿勢が重要だった。具体的には、教員自身が1人1人の学生の反応を個性との“出会い”と捉え、その「ユニークさ」を味わい、共有する姿勢を大切にすることで、学生が自分の発言に自信を持つ様子が感じられた。最も大切だったのは、学生同士の自由な語り合いであり、立場や距離の近いクラスメイトとのやりとりを通して、新たな気づきを得る学生が多かった。授業においても、カウンセリングと同様に、対話的な関わりが学生の参加を促し気づきにつながると考えられた。

4) 教員自身が「自己一致」の態度に関わること

授業のプロセスで生じる教員側の実感（面白い、違和感等）を意識的に受け止め、意味づけ、必要に応じて「～と思った」「～は疑問に思ったが、皆はどう考える？」等の率直なコメントや疑問を投げかけることで、学生に新たな「発言」や「提案」が生じた。授業は教員と学生が共に創っていくプロセスである。教員がカウンセリングの「自己一致」の態度に関わることが、学生の主体的態度に影響したと考えられた。

5) 試行と修正を繰り返しながら授業内容を改善すること

授業は「事前の学生理解に基づく計画→実践→学生の反応を踏まえた修正→新たな計画」という循環的なプロセスで展開された。カウンセリングにおける「仮説生成－検証－修正の過程」（下山，2008）と同様に、常に学生の主体的な学びの進捗を振り返りつつ、柔軟に内容を修正・改善していくことが重要だろう。

総合考察

学生の主体的学びを促す5つの視点は、傾聴・共感・自己一致を大切にするクライアント・センタード・アプローチの知見と重なる。主体性は関係性の中で育まれるものであり、教育実践においても同様に、スチューデント・センタードに基づく関わりが、主体的学びを支える重要な視点であると考えられた。

文献 下山晴彦(2008) 臨床心理アセスメント入門, 金剛出版.